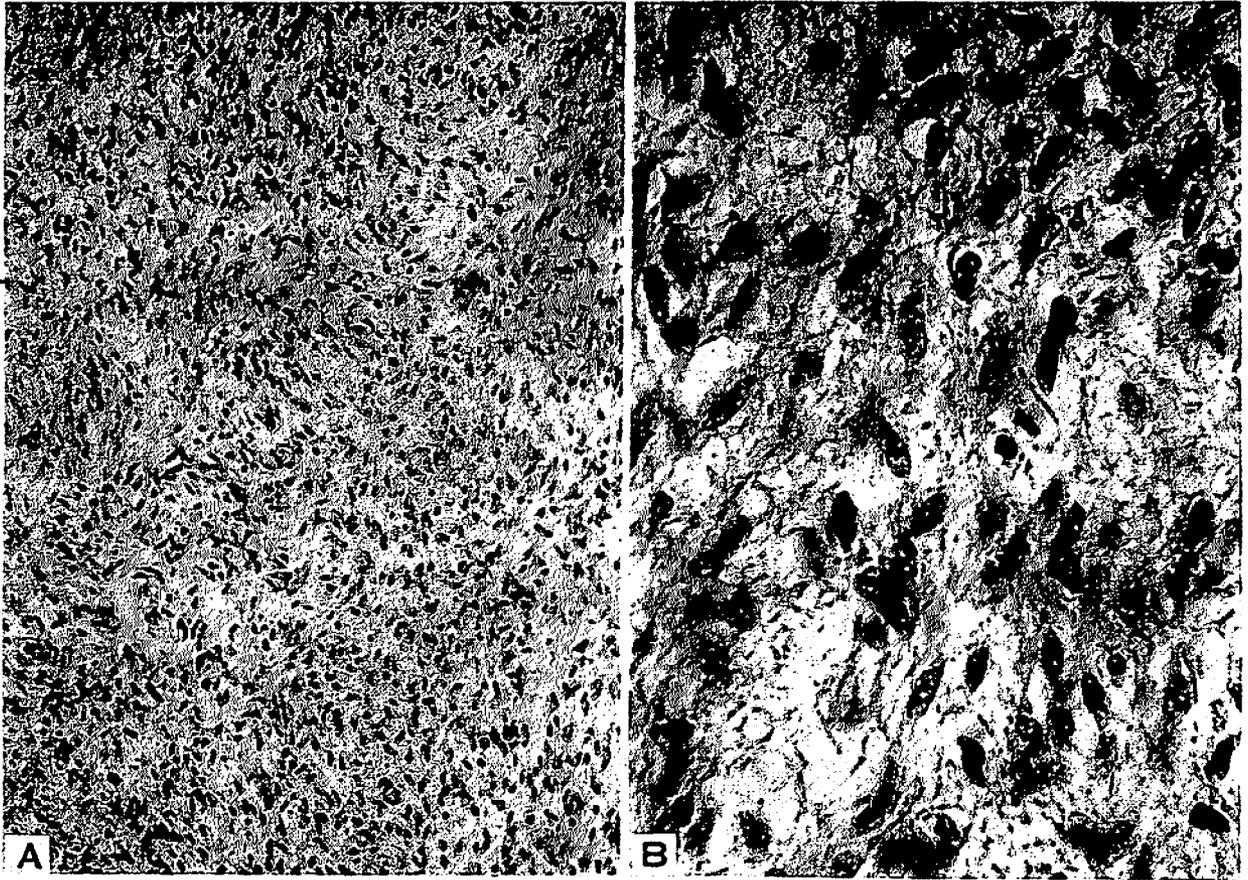


牛の内股部に発生した神経線維腫

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.234



動物：褐毛和牛、10ヵ月令、雄

臨床所見：昭和43年5月鹿児島県阿久根市の肥育業者が熊本県より5ヵ月令の褐毛和牛を購入、当時右股部に腫瘤が発生していた。飼養中腫瘤が漸次大きくなり、外貌の醜悪と運動に支障を来たしたので、昭和43年10月本大学家畜病院に入院し、摘出手術を行なった。その他臨床所見には異状は認められなかった。

肉眼的所見：摘出した腫瘤は重量2.6 kg、大きさ24×19×15cm、でバレーボール状を呈していた。表面は皮膚組織に被われているが、被毛殆んどなく、淡桃色を呈し、所々深い凹凸がみられた。剖面は均質、灰白色乃至淡桃色で皮膚組織が明瞭で、硬度は普通である。

組織学的所見：写真Aは真皮組織に紡錘形、楕円形の核を持つ細胞が不規則に錯走し、増殖していて腫瘍性的変化を示している。写真Bは腫瘍像の拡大であるが、腫瘍細胞は紡錘形、楕円形、波状、或はくびれなど多様性

を示し、又空胞状にみえるところがある。この領域では僅かではあるが、格子線維の発達が見られる。又所々境界明瞭な神経束がみられ、上皮、皮脂腺等の増殖像もみられるが、全体は写真に示した如き腫瘍病変である。

腫瘍細胞は神経系の細胞である。末梢神経に発生する腫瘍は一般に神経細胞系と神経鞘系に大別される。前者は神経芽細胞から生ずる腫瘍、後者は神経鞘腫及び神経線維腫が含まれている。本例では腫瘍細胞が紡錘状を呈し、波状に、あるいは屈曲して増殖し、僅かではあるが嗜銀線維の発達も認められるので、シュワン細胞由来の神経線維腫と診断されよう。

由来神経線維腫は神経節の異常発生による過誤腫と考えられている。人の皮下に多発することが知られている。家畜では牛及び鶏にその発生報告があるが、このような巨大な神経線維腫の発生は珍しい。